

「知ろう」から始めよう。

群馬県 中之条町立六合中学校 三年

山口 美瑚音

「女の子なんだから、おしとやかにしていなさい。」知り合いからそう言われたことがあります。私はその時、言葉を失いました。なぜ、どうして。沢山の疑問が湧いてきました。私は、外で活動することが大好きで、愛犬と森の中を駆け回ったり、友達と野球やサッカー等をしたりします。女の子は、女の子らしくおしとやかにしなければいけないのでしょうか。そもそも女の子らしいとは、どのようなことなのでしょう。男性の場合もそうです。「男なんだから泣くな」、「男らしくしっかりしろ」などと言う言葉もかけられています。

近年、ジェンダー問題という言葉をよく耳にするようになりました。最近はこの問題について様々な分野の方が発信してくださっているおかげで、表に出る部分が多くなりました。しかし、まだ身近で気づいていない問題はあるのではないのでしょうか。

少しジェンダー問題につながる私の物語を、皆さんにお話しします。私は小学一年生の頃から野球を始めました。チームの人数が少なかったため、小学二年生から他の地区の子たちと合同チームとして活動しました。このチームの監督は指導力があり、子どもたちに真剣に向き合ってくれる私の尊敬する方です。小学生の頃までは、このチームに所属し男女一緒に練習をし、野球に打ち込むことを通して、様々なことを学び、成長することができました。中学生になり、吾妻郡の部活の中で女子の野球部員は私だけとなりました。男子の中で野球をするのに抵抗は感じませんでした。しかし、力の部分ではついて行くのが困難な事もありました。監督に相談しながら自分の持ち味を活かそうと三年間必死で工夫してきました。女子の私も、チームの一員としての役割を果たし男子の仲間たちと沢山の素晴らしい経験を積むことができました。高校でも野球を続けたいと考え、色々なことを調べていくうちに一つの壁にぶつかりました。女子野球のできる高校が県内にはなく、県外にはあっても一部の私立高校に限られてしまうのです。男性だったら、当たり前に見えることが、女性だと当たり前前にはできないことがあるのです。なぜ同じ人間なのに格差が生じてしまうのでしょうか。そう考えた時、私には一つの言葉が浮かんできました。「偏見」です。ただ性別が異なっているだけなのに男の子だから、女の子だからという社会の決めつけに縛られていると感じました。

相手を「知ろう」という気持ちで接すること、それが私の偏見との向き合い方です。相手のことを知らないから、偏見の目で見てしまうのだと思います。このように考え始めたのは中学二年生のときです。県外の志望校へ部活動見学に行きました。もちろん女子野球部です。その時私は、「高校生はなんか近寄りたがいし、女子の世界は怖そう」という偏見をもっていました。しかし、野球の練習に入る前から、沢山の先輩方が話してくれて非常に楽しい時間を過ごすことができました。練習中も私たちを気にかけてくれて、良いプレーができたなら、褒めてくれたり、応援してくれたりして、とても嬉しかったです。その時私は、「仲間として受け入れてもらえた」と感じることができました。最初は偏見をもっていた私も、相手が私のことを「知ろう」という気持ちで接してくれたから、私も知りたい、一緒にもっと練習したい、と思うことができました。お互いがお互いを「知ろう」として歩み寄っていた空間は、私にとって心地良いものでした。

偏見のない社会。それは、私達一人ひとりが自分らしくいられて、認め合える安心した関係性の中で、笑顔あふれる日常を送っている社会だと思います。ジェンダー問題は直ぐに解決していくものではないでしょう。しかし、私達にできることはあります。例えば、様々な立場・考え方・特性・違いを理解しようとするということです。人は、未知なものを恐れます。なら、「知ろう」とすればよいのです。理解しようと歩み寄ればよいのです。そして、少しずつお互いを受け入れて、尊重し、この世界で共存する仲間として、認め合っていければジェンダー問題は解決の道に進むと思います。

私は、来年高校生になります。様々な考えをもった人とより良い生活を送るために、相手と気持ちの良いコミュニケーションを取りながら、相手のことを「知ろう」という気持ちで接していききたいです。また、ある一面だけでその人の人間性を決めつけず、偏見の目で見ない人になりたいです。さあ、共に誰もが偏見の目で見られずに認め合いながら生活を送ることができると社会を目指し、一歩前へ踏み出してみませんか。